

514 謫居春雪

盈城溢郭幾梅花 城に盈<sup>み</sup>ち 郭に溢<sup>ぶ</sup>る 幾ばくの梅花ぞ

猶是風光早歲華 猶是れ 風光 早歳の華

雁足黏將疑繫帛 雁足 黏<sup>ね</sup>將<sup>や</sup>しては 帛を繫るかと思ふ

烏頭點著思歸家 烏頭 点<sup>つ</sup>著<sup>つ</sup>きては 家に帰らんと思ふ

※本文は、尊経閣所蔵本『菅家後集』に拠る。訓は筆者試読。以下同じ。

通釈

・雪は太宰府の町中にいっぱい降り積もり、いったいどれくらいの白梅が咲いたように思えるだろうか。

・この春雪の降り積もった景色はやはり、新春一番に咲く梅花そのものである。

・この雪が雁の足に粘りついていたら（匈奴で捕虜となっていた蘇武が雁の足に帛で書いた手紙をくりつけ、生きていることを知らせて故国に帰ることが出来たように）京の家族は、私の無事を知らせる手紙と思うに違いない。

・またこの雪が烏の頭に点々とついていたとすると烏の頭が白くなったと思つて（秦の人質となつていた太子丹が、烏の頭が白くなったことで都に戻ることを許されたように）この私も都に戻るようになったと家族は信じるに違いない。

川口久雄氏は「この詩は延喜三年（九〇三）正月、死の一ヶ月前ころの作品か、澄んだ自然観照。」と説明さ<sup>(3)</sup>